
ハイスクールD×D - 神ノ道化を継ぐ者 -

キラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D・神ノ道化を継ぐ者・

【Nコード】

N3782BA

【作者名】

キラー

【あらすじ】

とある事情で死んでしまった少年は兵藤一誠に憑依してしまった。そしてイツセーは生まれながらに持った力を隠しながら17年間過ごしてきたが、堕天使と名乗る少女に不意を突かれて殺される――夢を見た。

どうせ夢だからいいか……そう思っていた。だが、それがきっかけでイツセーは『日常』の世界から『非日常』の世界に足を踏み入れた。

第0夜：プロローグ（前書き）

初めましての人は初めまして、ご存知の方はお久しぶり、キラーです。

またお前か……って思う人たちも大勢いるでしょうが、暖かい目で見守ってくれると嬉しいです。

今回は現在アニメが放送中の「ハイスクールD×D」の小説にトライしました。あ、言っておきますけどISや遊戯王の小説も続けますよ。

1／10……序盤の部分を修正しました。

第0夜：プロローグ

俺の名前は兵藤一誠。周りからは「イツセー」と呼ばれている。私立駒王学園に通う高校2年生で、左腕がちょっと以上で人並みにエロいだけのしがない人間ですね。ちなみに左手には白い革製の手袋をつけている。

最近は朝に弱いことが弱点だ。容姿は特に目立ったものじゃないけど……髪の毛は赤が少し混じった茶髪だ。他には特に変わったこととはないと思う。まあ、多少は並みの高校生よりも体力と力があるって大食いかな。

あ、あと右目が黒で左目が薄い赤のオッドアイでもある。これも遺伝らしい。何でもご先祖様は左目に呪いを受けていてそれが色濃くなって受け継がれたんじゃないのか、と言われていた。

さて、僕には2つ秘密がある。1つは……俺は転生者だということ。信じられないかもしれないが、本当のことだ。前世でもしがない高校生だったけどテンプレのごとく事故死してこの世界に転生した。もう1つの秘密は……おっと、教室に着いたな。

机に鞆を置いてイスに座ると、俺の机に2人の特徴的な男子がやってきた。

「あ、おはようございます、松田」

「うっすイツセー。それよりさ、新作のエロDVDが偶然手に入っただけだよさ、今度見る？」

「あー……都合がついたらでいいですか？」

俺に話しかけてきたのは野球少年のように髪を丸刈りにした容姿だけは典型的なスポーツ少年、松田だ。駒王学園に入る以前からの悪友だ。

ただ、欠点が1つある。それは日常で普通に卑猥な言葉を口にし

て、性欲を常に曝け出しているド変態だ。俺も人並みには性欲はあるけど、松田のような感じにはなりたくないですね。あまり変な目で見られるとおかしな噂が流れるだろうし。

ちなみに松田は写真部だ。昔は野球部に入っていてエースだったみたいだけど。写真部に入った理由は確か、「女子のパンツを拝めるから!」というくだらない理由だった。

「お前やっぱ枯れてる? それよりも、今日は強風のお陰でパンツヲ拝めたぜ……」

こっちはクールな台詞で卑猥な言葉を普通に口に出しているメガネをかけた変態2号、元浜。こっちもエロいことにしか目がない悪友2号だ。

すると松田がさっき話していたDVDを鞆から取り出す。……あれ、DVDって学校に持ってきたらダメなんじゃ……?

「うわ、またあの2人だよ」

「マジ変態」

「あれに巻き込まれてる兵藤くんはかわいそうだけど……」

ほら、女子が引いてるじゃん。あと最後の人、ありがとうございますます。

「やっぱりお前枯れてるんじゃない? こんなお宝目にしても何にも言わないなんて」

「いいじゃないですか、興味ないですし」

「え? マジ?」

「はい、マジです」

2人は「どうしてだー!？」と叫ぶ。教室内ですから少しボリュ

ーム下げてくださいよ。

と、元浜が何か思い立ったのか、俺に話しかけてくる。

「そーいやお前、俺には彼女がいました的な妄想話してたよな。その影響か？ 夕麻ちゃんって名前だっけ？」

「妄想じゃありませんよ。……でも、本当に俺以外は覚えてないんですね」

「前にも言ったけど、俺も元浜も夕麻ちゃんなんて子は紹介されないぜ」

「そう、ですか……」

やっぱり、夢なのかな……。

その夢は俺に一目ぼれしたらしい他校の生徒、天野夕麻ちゃんが俺に告白してきて俺はそれを承諾、園子と恋人になったという内容だ。その後松田と元浜に夕麻ちゃんを紹介して2人がかなり俺のことを非難してきたっけ。

で、数日後の日曜にデートの約束をしてその日はたくさん遊んで、仕舞いには噴水のある公園で夕麻ちゃんに黒い羽が生えて俺の腹に光で構成された槍を刺して、俺が殺されるという夢。

その夢では殺される直前、俺は左腕を異形のものに転換して必死に応戦したっけ。
コンバート

「とにかく見るだけ見ろよ。そうすりゃお前も俺たちみたいになるって。なあ松田」

「おうよ」

いや、それだけはいやだな……。

そんなことを思っていると、松田と元浜が窓を覗いている。大方登校している女子でも見てるんだろ……。

「何見てるんですか2人とも？」

「もちろん女子に決まってるだろ！ イッセーも見ようぜ！」

「俺はいいですよ……って押さないでください2人とも！」

「「いいではないかいいいではないか」」

なんかおかしくなってるぞこの2人……。

で、窓側に押された俺は仕方なく窓を覗く。視界にはもちろん登校している女子や数少ない男子が見えた。その中には隣のクラスに所属していてイケメンで俺の友達の木場祐斗もいた。相変わらず女子に囲まれているな。……ちょっと羨ましいかも。

と、そのとき、視界に紅に染まった髪が映る。そう、どんな紅色よりも紅い髪、ワインレッドよりも濃いんじゃないかと思うくらい引き寄せられる。

うちの学校で紅い髪の人物なんて1人しかいない。

3年のリアス・グレモリー先輩。

成績優秀で全生徒の模範になっている美人の先輩だ。確か北欧の出身だって松田に聞いたことがある。

「お、リアス先輩じゃん！」

「いつ見ても可愛いな」

「だよな」元浜。イッセーもそう思うだろう？

そうだね、と適当に返そうと思ったところで、俺に異変が起きた。偶然リアス先輩と目が合ったときに心臓が激しく、ドクン、と疼いた。1回だけだったからよかったけど……。

「おいイッセー、スゲー汗だぜ。大丈夫か？」

「あ、うん……大丈夫。今朝見た変な夢を思い出してただけだから」

「そっか。けど無理はするなよ」

「ちゃんと保健室で見てもらえよ」

「……2人とも、ありがとう」

この2人が真面目なことと言うの始めて聞いたよ!! 本当に2人とも俺のこと心配しているみたいだし、ありがとうございます!

下校して松田、元浜の2人と別れた俺は家の近くにある公園でブラブラしていた。家に帰りたいってわけじゃないけどなんか……俺の身体がおかしい気がする。

そんなことを考えていると誰かがこちらに来る。気づいたのは足音が聞こえたからだ。

「どうかしましたか?」

「あ、いえ、なんでもないです」

「そうですか」

俺に話しかけてきたのは20代前半の女性だった。胸は多分Eカップで顔も美人だ。……おっと、ダメだダメだ。あの2人みたいにはあまりなりたくないしね。

「それで俺に何か用ですか?」

俺が女性に質問したのと同時に女性の雰囲気が変わる。そして、俺の左目も何かに警戒するように言っているのか、うごめく。

質問の内容を答えようと女性は口を開く。

「あなたを始末しに来ました、兵藤一誠」
「……ッ!？」

一瞬だった。

目の前の女性が突然右手に光で構成された槍を生み出してこちらに投げってくる。警戒して正解だったのか、俺は左腕で光の槍を防ぐ。

「……な、なんですか、その左腕は!？」

「あ、これですか? 『神の結晶』と呼ばれたものが左腕に擬態したものですよ」

そう言って俺は光の槍によって破れた手袋を外す。

露出したのは、漆黒の十字架が埋め込まれた赤黒い左腕。それは血のような色をしていて、明らかに人の肉体ではない。

俺は左腕に意識を集中する。そしてすぐに左腕は異形のものへと
コンバート
轉換した。

左腕は大型の銀色の鉤爪に変化して、手の甲に値する部分には黒い十字架の刺青が施されている。

これが俺の『神の結晶』、俺の思いに応えて発動に似た状態となった十字架。
クロス

「あなた、もしかしてエクソシスト……!？」

「そうです。……こんばんは、墮落した天使さん」

俺がそう答えると顔を歪めて漆黒の翼を発生させて羽ばたかせる。

「逃がさない――!」

「ひっ!?! ……きゃっ!」

俺は伸ばせるだけ左腕を伸ばして墮天使を拘束して地面に叩きつ

ける。

そして俺は十字架クロスを振りかざす——！

「哀れな意志に、魂の救済を！ 十字架クロス・グレイヴノ墓！！」

鋭い十字架が墮天使を覆い、切り裂く。

彼女の身体は細かい粒子となって消え去っていく。

「あなたも、好きで墮ちたわけじゃないんですよね……」

俺は墮天使が遺した漆黒の羽を地面から拾う。そこから、何故か彼女の気持ちが読み取れた。

好きでこんなに歪んだわけじゃない。

けど、甘い誘惑に逃れられなかった自分も悪かったの……。

……すみません、殺すことになってしまっただけ。まだ、生きていたかったでしょう。俺も本当は殺す気なんてなかった……こんなことを言っても言い訳にしかありませんが……。

「どうかあなたが、安らかに眠れますように……」

俺の名前は兵藤一誠。

19世紀末に存在した黒の教団の大元帥、アレン・ウォーカーの子孫で『神の結晶イノセンス』、神ノ道化クラウン・クラウンの適合者だ——。

そして、俺の物語はまだ始まったばかりだ。

第0夜：プロローグ（後書き）

最後のほうは少しおかしかったですね。

イッサーがイノセンスの力を使える、っていうことを表現したかったんですけどね……。

第1夜：非日常は突然に（前書き）

意外と早く投稿できました。予定では明日、明後日のどちらかにする予定だったので。

それではどうぞ。

第1夜：非日常は突然に

それは、2年生初日の放課後だった。

松田と元浜のお陰で他校ではこの2人ほどじゃないけどエロくて有名になった俺は帰り道の歩道橋で黄昏ていた。ちなみに、駒王学園と俺の家は徒歩10分の距離である。

なんとなく車道で走る車や沈んでいる最中の夕日を見ていたとき、少し開いた距離から他校の制服を来た少女に話しかけられた。

その子は天野夕麻ちゃんって名前で長い黒髪の清楚そうな雰囲気の子だった。

そして、

「私と、付き合ってください！」

突然、俺は告白された。

初めて告白されたからなのか、俺は深く考えずに夕麻ちゃんと付き合うことになった。……そのとき、左目が少し疼いたけど気にしなかった。

松田と元浜にも彼女を紹介した。「リア充爆発しろ！」なんて言われたけどバカじゃねーのと適当に返したっけ。

それから夕麻ちゃんと付き合い始めて1週間、今度の日曜日にデートしないか？ と誘われた。俺はもちろん肯定して帰ってすぐに準備したな。

デート当日、俺は待ち合わせ場所の某駅前で1時間くらい前に来ていた。夕麻ちゃんを待っている間に、魔法陣のイラストがプリントされた怪しげなチラシを貰ってしまっ、とりあえずポケットに仕舞って帰ったら捨てることにした。

で、夕麻ちゃんが来たときは楽しいデートになってくれよ、と思ったのと同時に、左目が疼いた。まるで夕麻ちゃんに対しての警告

を言ってるかのように。

そんなものは放っておいて俺は夕麻ちゃんとのデートを楽しむことにした。

けど、左目に従って警戒していればあんなことにはならなかったと思う。

……デートも終わって駒王学園の付近にある町外れの公園で夕麻ちゃんは俺のほうに振り向くと俺に1つ願いを聞いてくれない？
と言われた。俺は頷いて何を言われるのかドキドキしていた。

「——死んでくれないかな」

この台詞を聞いたとき、背筋が震えた。同時に左目が痛いほどに疼く。

逃げようとする、夕麻ちゃんは漆黒の翼を生やして俺の前に回りこんでくる。そして、右手に突然現れた光で構成された槍らしきものを投擲する。俺はそれを『神の結晶』イノセンスを発動して巨大化した左腕で握りつぶす。

防いだか？ そう思ったとき、腹の辺りが突然熱くなって痛みを發した。

恐る恐る腹部を見ると、黒いシャツと薄手の上着が俺の腹を中心に血が流れ始めた。同時に『神の結晶』イノセンスが強制解除される。

「ゴメンね。あなたが私たちにとって危険因子だったから、早めに始末させてもらったわ。恨むなら、その身に神器を宿させた神を恨んで頂戴ね」

セイクリッド・ギア
神器……なんだよそれ、『神の結晶』イノセンスみたいな代物……？

そう言う暇もなく俺は崩れ落ちて地面に倒れた。

すでに夕麻ちゃんはいなくなっていた。ちくしょ……血がどんどん身体から流れて意識を、保つのも、辛くなってきた……！

2度目の人生も早く死んじゃったな……せめて20歳までは生きてたかったのによ、まだ父さん母さんに親孝行も……してねえのに。あー、どうせならな……あの人の手の中で、あの人の胸に埋もれて死にたかったな……。

柄にもなく、変態な思考が浮かぶ。……これから死ぬって言うのに、何考えてるんだろ俺……。

死に際に……、強く思い浮かべたのは紅蓮の髪を持つ俺の高校の先輩……。俺の尊敬するあの人……。

すると、口から血反吐が出る……。もう死ぬのか……。まだ、生きてたかったな……。

「あなたね、私を呼んだのは」

瞬間、薄れ行く意識の中で声が聞こえた。

あんたは、一体……。そう言いたかったけど口がうまく動かない……。けど、聞いたことのあるような声だな……。

「もう死にそうね。傷は……。へえ、面白いことになってるじゃないの。そう、あなたがねえ……。本当、面白いわ」

何の話だ……？

「どうせ死ぬなら、私が拾ってあげるわ。あなたの命。私のために生きなさい——」

それだけ聞こえた。同時に俺の意識が消えて——夢から醒めた。

「……今のは、夢か……」

最後に聞いたあの声、本当に誰なんだろう……。服装はうちの学

校のだったからうちの生徒なんだろうな。

そんなことを考えていると、ベッドの後ろに置いてある時計が7時半前を指していた。

ヤバい！ 母さんに怒鳴られる！

俺は急いで制服に着替えて部屋のドアを勢いよく開ける。

ちなみに手袋を付け忘れてると父さんに言われたから再び部屋に戻ったのはまったくの余談だ。

駒王学園に到着して2時間目終了しての休み時間、俺はノートと向き合っていた。あ、昨日倒した堕天使は救われたのかな……。堕天使の魂は本当に救済されたかわからないけど、俺はそう信じている。……偽善かもしれないけど。

で、ノートと向き合っている理由は……勉強がわからないからだ。さっきの授業は国語で古典の授業だったんだけど、俺は漢文やそのあたりがかなりニガテだからほとんど授業についていけなかった。理解できるところは理解できるけどその他がなんとも難しくて……。松田と元浜に言ってもダメだろうな。あの2人の知識は付け焼刃みたいなモンだし。

そう思っていると松田と元浜がこちらにやってきた。

うーん、これがいわゆる、噂をすればなんとやら、ってね。

「おーイッセー。実はスゲー珍しい物が手に入っただけだよあ、見る？」

「それって何ですか？」

「よくぞ聞いてくれたイッセー。松田がゲットしたのは……」

「じゃーん！ あの有名エロゲーのエロアニメの限定版！ いやー、手に入れるのに苦労したぜ……」

……なんでそんな物学校に持ってきたのさ！ 今日持ち物検査校門でやってたよね！？ バレなかったのかよ！？

しかも周りの女子はこの状況に気づいているようで、

「うわ、またあいつらだよ」

「変態」

「サイテー」

「エロ猿」

「兵藤くんかわいそー」

なんて言われている。最後の人、ありがとう。

「騒ぐな！ おら、女子供は見るな見るな！ 脳内で犯すぞ！」

「何言ってるの松田！？」

一応元浜にも助けを仰ごうとしたけど、元浜はDVDのパッケージを見ながら「おお、無修正版じゃん！」なんて言っている。

はぁ……神様、いるんだったらこの2人を止めてくださいよ……。

放課後、何だかんだで強制的に松田の家でエロアニメを見させられて飽きたので途中で抜け出てきた。

夕日が落ちた中で帰るために歩いていると、身体に違和感を感じ

た。

さっきもそうだったけど、暗くなっているところが妙に鮮明で明るかったり、夕暮れくらいから夜中に掛けて普通よりも力が湧いてくる。普通なら1キロ走ったら息切れするところが、普通に呼吸が可能なくらいに。

……とりあえず、早く家に帰ろう。

そう思った俺は公園の近くを通過して近道を歩いていく。

——ザワツ。

瞬間、左目が痛くなるほどに疼いて警告している。手袋をいつでも脱げるようにして俺はすぐに周りを見渡す。

原因はすぐに見つかった。

黒い帽子の被りスーツを着用した中年の男性。ポケットに手を突っ込みながら俺のことを睨んでいる。

かなり危険だ……！　そう思って俺は後ずさりする。

「これは数奇なものだ。こんな都市部でもない地方の市街で貴様のような存在に会うのだものな」

何言ってるんだ？　しかも、俺が『神の結晶』イノセンスを持っていることを知っている……？

「逃げ腰か？」

そりゃそうだ。アンタみたいな不審人物を見たら逃げたくなるのは普通だからね。

口に出さずに心の中で答える。

「主は誰だ？　こんな都市部から離れた場所を縄張りになっている輩だ、階級の低い者か、物好きのどちら化だろう。お前の主は誰なんだ？」

主？ わけがわからない……。
ただ、これ以上この場所にいるとヤバイ。左目が疼いてそう訴えている。

俺は少し後ずさりした後、隙を見て、とっさに全速力で逃げる。

……やっぱり走るスピードが異常に速い。でもこれはこれで好都合だ。早く逃げないと……！

何分走ったかわからない。とりあえず俺は公園の中心にある噴水まで走る。

……ここは夢で訪れた場所――。

そう考えていると空から黒い羽が幾つか落下してくる。発生源は、さっきの中年の男！

「逃がすと思うか？ 下級の存在はこれだから困る」

この男の背中には墨よりも黒い漆黒の翼が生えている。これは……

…墮天使って言うのが妥当か？

本物だとしたら、何で俺を付け狙うんだ？

「ふむ。主の気配はおろか仲間の気配すらもなし。消える素振りも見せない。……お前は『はぐれ』なのだな。ならば、殺しても問題あるまい」

殺す……！？

瞬間、男の右手には光り輝く槍のようなものが握られていた。っつーかこの状況……まるでつきり夢と似た状況じゃないか！

そう思ったときには男が槍を投擲して、その槍は俺の腹を貫いていた。腹からは血が溢れて染みを作る。貫かれた部分が熱い……。

激痛がする。

貫かれた部分からさらに血が溢れ出して、小さな血溜まりを形成

する。

しかも、あまりの反応の速さに俺は『イノセンス神の結晶』を発動することができなかった。

「ぐ……が、ア……！」

俺は左手で槍を引き抜いて、放り捨てる。

そこへ、俺のほうに近づく足音……帽子の男のものだろうな。

「ほお……弱めの光で形成した槍だけでも殺せると思ったが、意外としぶといな。だが次は確実に殺す。これでおしまいにしてやろう」

再び男の手の中で光が収束して、槍の形を形成する。

あー、夢ならどうなったんだっけ？ 確かこの後紅い魔法陣が現れてそこから誰かが出てきて俺を助けてくれる……って感じだったけど。

ヤバい、意識が朦朧としてきた。だからなのか、左腕の十字架クロスがうまく発動できない。

そして、瞬間だった。

何の合図もなく俺の目の前で爆発が起きる。原因はわからないけど、男が右腕にダメージを負ったのは確認できる。

「その子に触れないでちょうだい」

透き通った声が聞こえる。その声の発生源である女性が俺の隣を通る。

その女性は真紅の髪を持ち、駒王学園の女子生徒用の制服を着用している。それだけで俺はこの人が誰なのかをすぐに理解できた。

そして、その容姿で彼女が夢で俺を助けてくれたことも理解した。リアス・グレモリー先輩。

駒王学園の3年生で俺の先輩……全生徒の憧れでもある人だ。

「……紅い髪を持ち主……グレモリー家の者か……！」

帽子の男が右腕を抑えて呟く。

「リアス・グレモリーよ。ごきげんよう、堕ちた天使さん。……この子にちょっかいを出すんだったら容赦はしないわ」

「ふっ……これはこれは。その者はそちらの眷属か。この町もそちらの縄張りというワケだな。……まあいい。今日のところは帰ろう。だが、下僕を放し飼いにしないことだな。私のような者が散歩がてらに狩ってしまうかもしれんぞ？」

「ご忠告痛み入るわ。けどね、この町は私の管轄なの。私の邪魔をしたらそのときは容赦しないわよ」

「その台詞はそのままそちらに返そう、グレモリー家の次期当主よ。我が名はドーナシック。再び見えないことを願おう」

ドーナシック、そう名乗った男は4枚の翼を展開して羽ばたかせる。その身体は漆黒の空へ。一瞬だけこっちを一瞥したのが確認できた。確認できたのは、視力が1,5はあるからだ。

突然、再び貫かれた箇所が痛み出す。続けて押さえてる手を伝ってドロドロした鉄臭い液体が腹から少し流れてるのがわかる。

安堵したのか、急に目が霞んでくる……。

それに……息が荒くなってきた。意識ももう保てなさそう……。

すると、紅の髪を持つ俺の先輩が近づいてきて声を掛けてくる。

「あら、気絶してしまうの？ 確かにコレは少しばかり危険な傷ね。仕方ないわ。ねえきみ、自宅は——」

瞬間、意識がブラックアウトした。

それでも、意識が消える前に1つだけわかったことがある。

——いつも過ごしてきた日常が終わって、俺の知らない非日常が始まろうとしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3782ba/>

ハイスクールD×D - 神ノ道化を継ぐ者 -

2012年1月13日19時56分発行